演題番号：C10

イミキモドクリームを使用したボーエン様上皮内癌の猫の１例

○弓場安紀子

ダクタリ動物病院 京都医療センター

1. はじめに：ボーエン様上皮内癌とは、表皮内に限局し浸潤性増殖に至っていない扁平上皮細胞由来の稀な悪性腫瘍である。高齢の犬と猫にみられるが、好発品種や雌雄差の報告はない。日光暴露や色素量とは無関係で、口腔内粘膜や体表の様々な部位に発生し、パピローマウイルスが関与するとされている。扁平上皮癌や基底細胞癌への転化が起こりうるため外科的切除が推奨されるが、多発性であることが多い。今回、ボーエン様上皮内癌と診断された猫へのイミキモドクリームの効果を検討した。

2. 材料および方法：症例は 18 歳 3ヶ月令の雑種猫、去勢済雄。第１病日、左前第１指に過長爪が陥入し紅斑と出血および疼痛を呈していた。スタンプスメア検査で好中球の貪食像を認めたため、細菌培養検査結果に基づき抗生剤を投与したが効果は限定的で、真菌培養検査は陰性であった。第 58 病日、右前肢に出血と痂皮および疼痛を伴う局面を呈した。第 62 病日、局所麻酔下にて両前肢の皮膚生検を実施し、病理組織検査結果は毛包内のニキビダニを伴うボーエン様上皮内癌であった。第 76 病日、イミキモドクリームによる治療を開始した。イミキモドクリームは１日１回６時間塗布し、週１回剃毛および痂皮の除去を行った。病変の改善を認めた部位では塗布頻度を漸減した。また、第 363 病日にフルララネルを投与した。

3. 結　果：第 76 病日に左腰部、第 202 病日に左前肢、第 258・308・356 病日に右前肢、第 363・378 病日には右頚部に黒色痂皮を伴う局面が発現し、イミキモドクリームを塗布した。第 485 病日現在、両前肢と右側頸部への治療を継続しており、左前肢第１指以外では出血や疼痛もなく、良好に維持もしくは改善を認めている。塗布部位には発毛促進および皮膚の黒変を認めたが、塗布頻度の漸減とともに正常化し、それ以外に明らかな副作用は認められなかった。

4. 考察および結語：本症例においては、早期にイミキモドクリームの治療を開始した方が効果は高いと考えられたが、今回の使用法が最適か否かには検討の余地がある。本症例では陥入爪による外傷性炎症を疑ったため皮膚生検まで62日間を要したが、中高齢猫における難治性の皮膚炎には積極的な生検が望ましい。獣医療におけるイミキモドクリームの報告はまだ少ないが、本疾患が体表に発生し外科的切除を選択しない場合には治療の選択肢になりうると考えられた。